



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「ダビデの町」再考 : ミロとオペルのことなど
Author(s)	山崎, 保興
Citation	基督教学, 14, 29-32
Issue Date	1979-07-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46376
Type	journal article
File Information	14_29-32.pdf



「ダビデの町」再考

—ミロとオベルのことなど—

山崎保興

前号（第一三号）にエルサレムにおける発掘調査の歴史的経過についてその概要を紹介し、また昨年（一九七八年）度の本学会総会の折「ダビデの町」に関する若干のことについて素描的に述べる機会があったが、その際現場についての確認が甚だ不充分であることを痛感し（先年エルサレム滞在中は専らいわゆるオベルの発掘現場に関心を奪われていたので）、その後少々無理をしてエルサレム再訪を試み、この度は短時日ではあったが、連日エルサレム旧市街から南下して「ダビデの町」発掘跡に足を運んだ。折から好運にもイガル・シロ教授による、イスラエル隊としては始めてのこの地域の発掘作業が開始されたばかりの場面に行き合せ、もとより未だ新たな発掘情報を期待できる段階ではなかったが、それによっ

ていつそうの刺激を得、新たな興奮を覚えたことであった。その際前回とはかく漠然と丘の東側斜面をフィルムにおさめただけであつたために、発表に当つても写真はほとんど役に立たなかつたことを反省し、今回は始めから所要所に狙いを定めてシャッターを押したので、帰国後改めて各種関連記事と照合し、少なからず在来よりは鮮明な印象で理解を深めることが出来たように思う。その結果先に甚だ不確かな紹介報告をしてしまったことに今更の如く自覚と反省を促がされていた矢先、再び執筆の機会を与えられたのを幸い、改めてより正確な（とは言つても未だ充分なものとはなり得ないであろうが）紹介報告を試みたいと思う。ついては、今回は図版を入れることができないので、前号に掲載した写真（一二三頁）と見取り図（一二四頁）を参照されたい。該当地域は写真でも一見してそれと分る神殿山南方丘陵地帯の、ケデロン谷に面した東側斜面とその頂上部分である。

この地域における最初の居住地の痕跡は、断片的ではあるが紀元前四〇〇〇年紀にさかのぼるものと推定されている。発見された限りでの最も古い町の囲壁は青銅中期のものであるが、この時代の町そのもののプランはほとんど復原できない。青銅後期に至つてエブス人の城砦

があらわれるのであるが、今日残存しているその遺構は、急勾配の東側斜面の上に段丘状に姿をあらわしており、各段丘の上面のテラスに住居が建てられていたことが、段丘間に目撃される部屋の間取りやかまどの痕跡によつて判別できる。それはヨシヌア以来、長期にわたつてイスラエルの侵攻を許さなかつた程強固であつた。だが前一〇〇〇年頃、この丘は遂にダビデによつて占拠された。いわゆる「ダビデの町」はこのエブス人の城砦都市をそっくりそのまま利用したものであつたと考えられ、元来のエブス人の町の囲壁を基礎に、ダビデが更にそれを補強完成することによつて統一王国の首都をかたちづかつたものと推定される。その後ソロモンによつてこの丘の北方に神殿が造営され、その後分裂王国時代に市域は北に向つて伸展し、遂に神殿区域と結合されたものと考えられ、この伸張部分が後に「オベル」と呼ばれる地域となつたわけである。キャスリン・ケニヨン女史による発掘作業がすすむにつれて、いよいよはつきりと「ダビデの町」の範囲が全王国時代を通じて専らこの東の丘陵上に限定されていたことが分つてきた。

前五八七年、町はバビロニア人によつて陥落せしめられ、徹底的に破壊され無人化された。前五三八年、ペル

シア王クロスは捕囚民の一部を神殿再建のために帰還せしめたが、町の囲壁はネヘミヤのペルシア代官としての到来までは再建されなかつた。それはおおむね前四四五〜四三三年の間のことと考えられているが、ネヘミヤは「ダビデの町」の再建に當つて丘の東側斜面を切り捨てたもののようで、この時の城壁遺構は丘の頂上部陵線に沿つて存在している。

ネヘミヤの到来に先立つて、ゼルバベルによつて再建されたはずの神殿域の痕跡は遂に発見されなかつた。それは恐らくヘロデ大王によつて建設された巨大な台地の下に埋もれ、今日でもイスラムの聖所、いわゆる「岩のドーム」の周辺地下に遂に姿をあらわすことのない遺構として存在し続けているのであらう。ヘロデが神殿山の東西斜面に土盛りをし、大規模な囲壁をめぐらせてこれを支え、それによつて神殿域を拡大したこと、この囲壁に沿つて逐次様々な遺構が画期的な意味を帯びて発掘・発見されてきた状況の概略は、先号に紹介した通りである。

古代エルサレムの市域が次第に神殿山西方、西の丘の北端部分に拡大し始めたのもマカベア時代の後期からヘロデ時代にかけてのことと考えられている。それが最大

規模に拡張されたのはヘロデ・アグリッパの時代、即ちほかならぬイエス時代のことであり、それを最後に程なくこの町は壊滅への一路をたどる。

実際、一九七五年秋、神殿山南麓の発掘作業に従事していた時の筆者の日々の驚きは、その猛烈な破壊の跡であった。各区画において、堆積する土砂を除去した後の仕事は、専ら倒壊した重い石材の地表への搬出作業であった。若い学生たちと組んでのこの作業は少なからず消耗的なものであり、一度ならず負傷もしたが、同時にかの耗「ユダヤ戦争」期のエルサレム市民の抵抗が如何に消耗的なものであったかを実感をして想像したことであった。

自然落下による状態と、破壊によるそれとは、経験のない者の目にも容易に明らかに判別することが出来た。

東の丘陵と西の丘陵との間の、ヨセフスの記すいわゆる「テュロペオンの谷」は、今では全く跡かたもなく埋め尽されており（写真では白い道筋としてはっきり看取できる）、然もそれは専らローマ軍による破壊物によってであったと言われる。これまた元来の谷の地表は現在の地表から二〇〜三〇メートル下にあったことがケニヨンによって確認されている。

ところでオペル (Ophele) はヘブライ語では Ophla' ギ

リシヤ語では Ophlas であるが、ベニヤミン・マザール教授によると、これは元来王国時代後半にあらわれる城塞設計上の技術用語であったという。エルサレム以外にも、北王国イスラエルの首都サマリヤのオペル、モアブの王メシヤの首都ディボンのオペル等があり、語源的には「上げる・高める」の意であり、要するに適正に計量された高さにまで持ち上げられた構造物を意味するものであったらしい。エルサレムにおいては言うまでもなく「ダビデの町」とモリア山上のソロモンのアクロポリス（神殿と王宮を包含する）との間に構築された新しい城塞設計であった。

王国時代初期にはこの間は低地になって切れており、そのため「ダビデの町」たる首都そのものの防衛のために築かれたのがほかならぬ「ミロ」であった。これについては既に「サムエル記」下、五・九にダビデ自身の作業状況が述べられており、また「歴代志」上、一一・八にも、幾分あいまいな感じではあるが同様の記事が見られる。ソロモンもまたこれを踏襲した（「列王記」上、九・一五）。のみならずこのことはやがて王国分裂へと事態を導くヤラベアムの叛乱の原因ともなった（「列王記」上、一一・二七以下）。「ソロモンはミロを築き、父ダビデの町

の破れ口をふさいだ」との一節は、今日われわれの「ミロ」の役割についての推理をいっそう容易にするものであろう。状況から察してソロモンの工事は外ならぬ彼自身のアクロポリスから「ダビデの町」を分離する効果をもつたように思われる。この謎めいた消息に関する筆者自身の疑問は目下容易に解明の手がかりを得ないのであるが、それはそれとして当時ソロモンのおかれていた状況は甚だ容易ならぬものであったにちがいない。彼の治世の後半に国際情勢が決定的に変化した。前九四五年頃エジプトで王朝が交代し、新王朝の創始者シシャクは前王朝と婚姻関係をもつソロモンに敵意を抱いていた。アラムとエドムに叛乱が起り、エドムは鎮圧できたがアラムはダマスコを中心に分離独立した。このため北方貿易路が妨げられ、同時に北辺の軍備増強を迫られて出費を増した。エジプトに備え、南部にも要塞都市の建設を必要とした。更に最重要事としてエルサレムの要塞化がもくろまれ、ミロが建設された。この時、エフライムから徴用された強制労働者の監督をソロモンから任されていたヤラベアムが「王に対して手をあげた」のである。「ミロ」とは元来「充填」を意味することばであり、実際にまず擁壁を築き、それと斜面との間に盛り土をし

て段丘を作り、石としくいでテラスを固め、更にまたその上に同様の方法で段丘を重ねて構築したものと思われるが、実際に現地でわれわれがそれを見る時、前述のエブス人の城砦跡との構造上の区別はつけ難く、唯エブス人のそれは斜面の下部を構成し、ミロはその上部構造部分をなし、説明によってその境界線を知り得て始めて全容をなつとくする、というのが正直なところ筆者自身の理解の実態であつた。ともかくも、ヤラベアム監督下の当該作業過程が相当の難工事であつたろうことは容易に察せられる。このミロと称する構造物が少くともヨアシの時代まで維持されたいことは、彼が「ミロの家」で殺されたという記事（「列王記」下、一一・二〇）から推定できるが、この後「ミロ」は全く現われず、それに代つて専ら「オペル」が顔を出してくるようになる。ヨタムに関する記事（「歴代志」下、二七・三）、マナセに関する記事（「歴代志」下、三三・一四）等がそれである。こうしてみると「ミロ」も「オペル」もその意味と役割は概ね同様のもののようであるが、唯その建設場所の違いと、前者が王国時代の前半に、後者がその後半に役割を占めているという事情については、いま少しく思いをひそめる必要があるのかもしれない。